緑の地球　第101号　2006年9月15日発行　1998年8月5日第3種郵便物認可　年6回・奇数月15日発行　年間購読料2,000円（送料含む）定価300円
発行：認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク　〒552-0012 大阪市港区市岡1丁目4-24 住宅情報ビル5F　TEL. 06-6576-6181　FAX. 06-6576-6182
IP電話 050-3119-0204　郵便振替　00940-2-128465　E-MAIL：gentree @ s4.dion.ne.jp　URL（ホームページ）：http://homepage3.nifty.com/gentree/

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

8月26日、環境林センターで協力15周年の記念式典がおこなわれた（2頁参照）

Contents

●中日黄土高原合作緑化15周年記念式典 …… P 2
● 2006霊丘自然植物園の鳥類 …… P 3
●ワーキングツアー日誌から …… P 4
●自治労大阪府本部ツアー …… P 6

2006.9
111

認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク

GENに参加するには　☆会員・会報購読者になる　☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する　☆ワーキングツアーに参加する
☆ビデオ『よみがえる森』を見る　☆書き損じハガキ・古切手を集めて送るetc.　★あなたのご参加を待っています！

“中日黄土高原合作緑化 15 周年” 記念式典　盛大に開催

ツアー派遣 10 周年のイオン労働組合新妻委員長が挨拶

8 月 26 日に大同での協力拠点、環境林センターで、15 周年記念イベントが盛大におこなわれました。今年ツアー派遣 10 周年を迎えたイオン労働組合の新妻健治委員長以下 22 名、そして昨年に続いて大同を訪れた日中友好沙漠緑化協会の武村正義会長をはじめとする 72 名など、総勢およそ 100 名の日本人が出席しました。

大同市からは、豊立祥市長、馬福山党委員会副書記、李世傑総工会主席、冀明徳副市長、馬維平人民代表大会常務委員会副主任、徐世立政治協商会議副主席、李方明外事辦公室主任などが出席し、壇上に並びました。

李世傑総工会主席が 15 年間の活動報告をおこなったあと、馬福山副書記から祝辞をいただきました。また、このたび高見事務局長に大同市の栄誉市民の称号が贈られることが大同市人民代表大会で決定し、豊立祥市長から「大同市栄誉市民」の証書が高見事務局長に授与されました。

式典の後は、華やかな演技がステージ上で次々と繰り広げられます。山西省の民族舞踊など、大音量の音楽とともに、大迫力の歌や踊りで参加者を魅了します。大同市総工会の柴京雲副主席と娘の柴帥さんの二胡のデュエットもステージを盛り上げました。

大同事務所のスタッフは、武春珍所長の指揮で、この式典を 1 か月かけて準備してきました。7 月中旬から日本からのツアーを途切れることなく受け入れながら、見事この式典を成功させました。その力量にはただただ敬服させられます。大同のスタッフが心をひとつにして、15 年という歳月の重みを体現してくれた素晴らしい式典だったと思います。（会田）

GEN 自然と親しむ会

大野アルプスランドで自然観察と里山体験

●日時:11 月 12(日)10 時～ 15 時ごろ(小雨決行)
●内容：大野山頂上周辺のアルプスランドで自然観察と里山の整備体験（天候その他の条件によって変更することがあります)。
●集合：8 時 30 分　JR 宝塚線「川西池田」駅前
●もちもの：弁当・水筒その他
●定員：30 人
●参加費：1,000 円（保険料、ガソリン代ふくむ）希望者は天文台入場料 200 円別途。
●問合せ・申込み：GEN 事務所まで
※ひょうご森の倶楽部猪名川町グループの作業日にごいっしょさせていただきます。詳しくは同封のチラシをご参照ください。

助成が決まりました

国土緑化推進機構「緑の募金」助成が決まりました。

公募事業として環境林センターの建設運営に 190 万円。中央事業として果樹園建設に 300 万円です。中央事業は（株）ローソンのご協力によるものです。

GEN は認定 NPO 法人です GEN への寄付金は 税控除をうけられます

GEN は国税庁の認定をうけ、2005 年 6 月 1 日から認定 NPO 法人になりました。認定 NPO 法人への寄付は寄付金控除等の対象となります。

○個人の場合、「寄付金額－ 5 千円」を所得金額から控除できます。
○企業の場合、一定の条件下で寄付金を損金として扱うことができます。
○相続・遺贈による財産を寄付した場合、相続税の課税対象になりません（対象になるのは相続税の申告期限までに寄付されたものです)。

GEN15 周年記念企画

加藤登紀子ランチタイムコンサートのご案内

緑の地球ネットワーク 15 周年を記念して、加藤登紀子さんのトークアンドライヴショーをおこないます。

加藤さんには国連環境計画親善大使として 04 年 7 月に大同を訪ねていただきました。その時のこともまじえながら、緑化や環境問題について、高見事務局長と話していただきます。

2 人で話しはじめるととまらなくなるのではないかと心配ですが、高見さんには早々に退場ねがって、加藤さんに百万本のバラなど懐かしい歌、新しい歌などを歌っていただきます。

スンガリーの美味しいロシア料理もお楽しみに！

●場所：テアトロスンガリー青山（営団地下鉄銀座線／千代田線／半蔵門線「表参道」駅 A3 出口徒歩 1 分　TEL. 03-3475-6648）
●日時：9 月 30 日（土）12 時開場、12 時 30 分開演～ 15 時ごろまで
●会費：10,000 円（飲食代込み）
●定員：120 名（先着順）
●問合せ・申込み：GEN 事務所まで

2006年霊丘自然植物園の鳥類

池本　和夫（GEN会員）

霊丘自然植物園は霊丘県上寨鎮南庄村に1999年3月に開設され、86ヘクタールの面積がある。開設当初から地元の南庄村と協定して、用地内ではヒツジやヤギなどの放牧と柴刈りを禁止した。2000年秋には管理棟が完成し、職員が1人寝泊まりして、放牧等で農民が入山しないように見張りをしている。

今年（2006年）春で開設から7年が経ち、家畜の放牧や草木の伐採を禁止する封山育林の結果、今までは育つそばから食われていた草や灌木は目に見えて回復している。同時に、鳥類にも種類や数の増加傾向が見られ、植物相が豊かになると動物相も豊かになるという自然界の法則に沿っているようだ。

2000年、2003年に続き、2006年にも3月下旬の数日間、植物園で鳥類調査をしたので、その結果を報告する。調査範囲は従来同様、苗木保管棟の下方（植物園用地と南庄村の農地の境界）から谷筋沿いに植物園管理棟を経て、池や畑跡地の周辺、小川の起点（湧水点）までである。

2000年は11種・約31羽、2003年は15種・約54羽に対して、2006年は14種・70羽（いずれも範囲外や上空通過は含めない）観察され、3年前に比べて、種類はほぼ同じだが、羽数は16羽増えている。

2003年の調査では、山地の草叢や灌木、低木の間で活動する留鳥のカラチメドリとダルマエナガが新たに登場したことに注目し、2000年からの3年間でこの両種の好む生息環境ができ、新しい生息地を探していた個体が入り込んだ、と解釈した。今回はカラチメドリはいたが、ダルマエナガは見られなかった。また、前回はスズメが新たに記録され、管理棟に職員が寝泊りするようになって、環境が変化した結果だと解釈した。植物園にはスズメが個体群を確立できるほどの“人間活動”はないらしく、今回スズメは見られなかった。

2000年春からの3年ごとの調査によると、鳥類の種類は増加のあと横ばい、羽数は増加が続いている。植物園の植生回復がその大きな要因であるが、それ以上に重要なのは湧き水である。池の上流の細い流れのそばに静かに座っていると、ヤマヒバリ、コウザンマシコ、ヒゲホオジロ、ホオジロなどが次々に水を飲みに来る。もしこの湧き水が枯れれば、おそらく大部分の鳥はいなくなるだろう。今後、植生の変化とともに、湧き水の変化にも注目する必要がある。

霊丘自然植物園のホオジロ（撮影：池本）

霊丘自然植物園の鳥類

和　名	学　名	2000春	2003春	2006春	生息状況・注記
1. アカゲラ	*Dendrocopos major*	1*			留鳥　＊単位は羽(以下同じ)
2. ヤマゲラ	*Picus canus*	2	1	2	留鳥
3. ヤツガシラ	*Upupa epops*	(1*)			留鳥　＊範囲外(植物園の隣接地)
4. モズ類	*Lanius sp.*	1			
5. サンジャク	*Urocissa erythrorhyncha*	3	声	15	留鳥
6. カササギ	*Pica pica*		(上空2)	3	留鳥
7. ベニハシガラス	*Pyrrhocorax pyrrhocorax*		(上空4)	(上空8)	留鳥
8. ノドグロツグミ	*Turdus ruficollis*	2*		2*	冬鳥　＊亜種ノドアカツグミ
9. ルリビタキ	*Tarsiger cyanurus*	4		5	夏鳥
10. ジョウビタキ	*Phoenicurus auroreus*	3	4	3	夏鳥
11. ミソサザイ	*Troglodytes troglodytes*		1		留鳥
12. シジュウカラ	*Parus major*		3	3	留鳥
13. エナガ	*Aegithalos caudatus*		3	2	留鳥
14. カラチメドリ	*Rhopophilus pekinensis*		5 ±	5	留鳥
15. キタガビチョウ	*Garrulax davidi*	2			留鳥
16. ダルマエナガ	*Paradoxornis webbianus*		8		留鳥
17. スズメ	*Passer montanus*		1		留鳥
18. ヤマヒバリ	*Prunella montanella*	1	2	4	冬鳥
19. カワラヒワ	*Carduelis sinica*	2	9	15	留鳥
20. コウザンマシコ	*Carpodacus pulcherrimus*	?♀2		5	冬鳥
21. ヒゲホオジロ＊	*Emberiza godlewskii*	5 ±	7	3	留鳥　＊新和名ミヤマヒゲホオジロ
22. ホオジロ	*Emberiza cioides*	5 ±	7	13	留鳥
種数の合計＊		11種	15種	14種	＊（）の範囲外・上空通過は含めない
羽数の合計＊		約31羽	約54羽	70羽	＊（）の範囲外・上空通過は含めない

和名：山階芳麿 (1986)『世界鳥類和名辞典』大学書林

学名・配列：John MacKinnon et al. (2000) A Field Guide to the Birds of China. Oxford University Press

生息状況：樊龍鎖ほか編 (1998)『山西両棲爬行類』中国林業出版社

采涼山で、白登苗圃で……木々の成長ぶりに大感激

～ワーキングツアー日誌から～

今夏の大同は、休む間もない大忙しでした。自治労大阪府本部（7/13～19、20名）を皮切りに、GEN（7/29～8/5、31名）、明星大学（8/4～13、10名）、サントリー労働組合（8/19～26、12名）、イオン労働組合（8/23～28、20名＋他企業から参加２名）、摂南大学（8/28～9/4、８名）のツアーを受け入れました。また、ODA民間モニター（8/23、15名）、日中友好沙漠緑化協会（8/26、72名）、宝塚グリーンライオンズ倶楽部（9/2～3、５名）が大同を訪問、それぞれにGENのプロジェクト見学、大同市幹部との懇談会や植樹をおこないました。

今年のGENのワーキングツアーでは、「ゆとりの活動」をもうけました。いつもぎっしりつまった日程に少し余裕をつくって、大同の農村生活や自然、街のようすなどを見てもらおうという企画です。村の日常、高山植物、万里の長城などを楽しみました。

それでは恒例、GENのツアー日誌から一部を抜粋してご紹介します。

【7月29日（土）】

出発。北京からバスで天鎮県に移動。

▼行程中道路は何度か鉄路と交差した。その上を走る列車の長いこと。動力車は100車両以上の貨車を引っ張っている。そのような編成が3つも繋がっているものもある。通り過ぎて少し離れるとどっちが列車の頭だったか、しっぽだったか判然としなくなる。列車は悠揚迫らぬ態で走り続けている。北京に通ずる石炭運搬専用の鉄道だとか。

18時頃陽原の料金所で高見事務局長と大同の関係者の出迎えを受けた。以後は高見さんがバスに乗り込んで来られて適時適切に沿道の風景やら今年の気候や植物の生育状況についての説明があったのでたちまち霧が晴れた感じ。しかし周囲は既に薄暮。（松園譲）

【7月30日（日）】

天鎮県新坪鎮で植樹活動。

▼8時40分、大型のバスで宿を出発。バスはあえぎながら峠をのぼる。浸食をうけて、表土が流されたガレ場が目につく。高さ1,500ｍ程度の峠を越えて、新坪鎮に到着。子どもたちの熱烈な歓迎をうける。そのまま新坪鎮の地球環境林にむかう。昨年植樹した場所は、バスを降りて30分ほど登ったところであった。根鉢のビニール袋をやぶいてなく、春に植えたアブラマツが枯死して補植であった。その反省が生かされて、あいさつの中で「ビニール袋は必ずやぶいてください」との説明があった。その後の説明の中で、「灌水後は、よく踏んでください」といわれ、「この地域では乾燥しているので必要です」と説明されて、技術の定植には時間がかかると実感した。昨日の雨で湿度が高く、強烈な日ざしの下で、汗をかきながら、植栽をした。子どもたちも洗面器で、水を運んでくれた。中国の植林は11回目であるが、これだけ汗をかいたのは初めての体験であった。（藤原國雄）

洗面器で水を運んでくれた新坪鎮の子どもたち

【7月31日（月）】

天鎮県新坪鎮でゆとりの活動。

▼昨夜は、ツアーの中で最も期待していたホームステイ。想像していたよりこぎれいな龐さんの家でご馳走になり、見事な満天の星々を眺め、ツアー2日目を終わり、床についた。疲れていたのかぐっすりと眠り、今日、5時半起床。生憎の雨で早朝の村の散策を予定していたが中止。すでにご主人の龐さんと奥さんは朝食の準備を始めておられ、ご長男は羊、ロバにエサを与えておられた。（中略）9時30分頃、現地に到着。大同事務所の武所長他の皆さんも同道、高見先生のお話を聞きながら、かれんな小さな花を咲かせる高山植物を観賞し、薬草などを教えていただいた。また、牛角嶺の緑化の歴史を聞いた。

1.「1985～86年頃『三北防護林』プロジェクトにより緑化が進められ現在に到っている」。樹木の成育状態は、20年の歳月を考えると、厳しい環境下であるからかこぶり。しかし、元気に成長しているように感じた。

牛角嶺のカラマツは植樹後約20年

2. 2008年北京オリンピックを控え、「大同は北京の花園」と称せられ、この地の緑化は非常に意義深い等々の説明があった。（篠原大）

【8月1日（火）】

大同希望学校を訪問。ゆとりの活動。

▼大きな教室で、学校の生徒が歓迎会を開いてくれた。ダンスやカラオケの熱唱、詩の朗読など、かなり熱烈な歓迎ぶりで、びっくりするやらうれしいやら。おとといの農村の子どもたちもそうだったが、こちらの子どもたちは自己表現（？）を全く恥ずかしがらないようだ。決めのポーズもバッチリ、目線もバッチリ。私たちはまた合唱をしたり、松本さんのたて笛による民謡や、中川さんによる手品で歓迎のお返しをした。子どもたちは中川さんのヤーッというかけ声に圧倒され、中川ワールドに引きこまれていた。日中共同で風船わり競争もやり、私も参加し

緑の地球ネットワーク年会費……一般会員＝12,000円・家族会員＝6,000円・学生会員＝3,000円

希望学校の生徒と風船割り競争

たが、私たち日本チームは大人気なく中国チームに勝利し（笑）、中国のしおりをもらった。（中略）私は長城見学ツアーに参加し、3ヶ所で長城に登った。2ヶ所目に訪れた村は、村全体が明の時代の城壁で囲まれていて、今でもその中に人々が生活していた。長城に登ると見渡す限り畑が広がっていて、広大な景色に感動した。この村に住んでいる人々は、何百年、何千年の歴史が積み重なった土地の上に、生まれた時から普通に生活をしているんだなーと思ったらなんだか不思議だ。（浅川景子）

【8月2日（水）】

采涼山、カササギの森、白登苗圃訪問。

▼GENのツアーには、5年前に参加した。その時の記憶といえば、名前の通りの褐色の黄土高原、石炭のせいか淀んだ空気（鼻が痛かったような…）、強風、凍えるような寒さetc.といったもの。ところが、夏は、セミがいない、大木がないといったものを除けば、ほとんど日本と変わらない。聞いてはいたものの、目で見て実感。日本と錯覚してしまうぐらいであった。あと、5年前、またそれ以前に植えられた苗の大きさを見たとき、その成長ぶりに鳥肌が立った。日々現地で管理している方々がいるからこそ、この状態までになったんだなと思う。また、自分のやってきたことは、ちっぽけだとも考えていたが、見渡す限り低木がひろがっているこの風景を見ると、そうではないんだなと感じた。

最後に、やはり子どもたちと遊ぶことは楽しい。今度は言葉を勉強してきたいと思います。（藤井幹生）

▼「白登苗圃」は昨春、開所式がおこなわれ、春のツアーに初めて参加した私も同席した印象深い所。式典後、施設の敷地の一部をコの字型に囲むように「シダレニレ」をみんなで植えた。そこがどうなったか。今回のツアーの楽しみのひとつだった。

「感動した」！　緑いっぱいになっていた。シダレニレは本数が増え若々しい葉をいっぱいにつけ、松の苗が一面に植えられ、それらの間には大豆などが植えられ、全体が緑に被われている。これ以上、緑化活動などする必要がないと錯覚させられるほど。

自前の苗圃を持つことは、数年来の強い願望であったと聞く。GENがやがてこの地を去る時がきても、継続的な緑化活動の収入源となり、さらに良質の苗を大同で広める役割を担うものとして。同様の趣旨で、この苗圃のまわりに果樹園を作ることも計画されているとのこと。

外国で活動しているNGO等は、できるだけ早く、その活動を現地の人々に委ね撤収することが望ましいと言われている。その意味で、GENが将来を見据えて活動していることを確認でき、当然のこととはいえ、安堵し改めて信頼感を増すこととなった。（米森文嗣）

▼カササギの森：まだ森にはなっていないので緑地公園か草原のよう。大変美しい。ここは小集落があって極貧の天水農業をしていたと思うと感慨深い。崩れた土の家が昔をしのばせる。家は丘の上なので歩いて登り下りするだけで疲れるくらいだ。

采涼山のマツの成長ぶりには鳥肌がたつほど感激

植樹。最近の雨で土が湿っていて植樹日和。土には小石が多く黄土ではない。この丘はかつては川底であったのか。ガチガチと掘っていると職員の青年がやわらかい層にそって掘るようにと教えてくれた。

白登苗圃ではマツの苗畑の草取り作業

1時間ほどで380本の苗を植えることができた。久しぶりの労働で少し腕が痛くなったが、気持ちよかった。（山口修）

【8月3日（木）】

雲崗の石窟、環境林センター。

▼ODAでの植林活動の経験がありましたが、NGOの植林は、はじめてでしたのでとても楽しみにしておりました。

実際、GENのリーダーやツアー常連の皆様と中国側・大同市側との厚い信頼関係には大変感激しました。ODAの場合、担当者が1年半から2年位で交替するので、現地ベースでの信頼関係の形成に苦労しています。

また、大同市側のカウンターパートが、市内で力のある（影響力のある）市青年聯合会→市総工会となったこともGENリーダーの見通しの確かさ（もしくは幸運）を表していると思います。事業成功の重要ポイントは、カウンターパートとの良好な関係づくりにあるとあらためて実感しました。

ところで、GENの事業の進展をふまえ、今後はGENの成功事例を他地域に拡げていくことも課題のひとつとなると思います。その場合は大同市で植林事業を担っている地方政府機関である大同市林業局もしくは山西省林業庁との連携について、検討してもよいのではないかと感じました。（長瀬誠）

『かけはしの森』定礎式に参加
自治労大阪府本部ツアー

春の下見のあと、満を持してともいうべき自治労大阪府本部のツアー一行20名が、7/13～19の日程で大同を訪れました。ツアーに先立ってお寄せいただいた550万円の寄付で建設に着手する「かけはしの森」定礎式にも参加しました。自治労大阪の新聞に掲載された参加者の手記を、一部転載させていただきます。

「かけはしの森」定礎式。白登苗圃の隣接地に建設する

考えさせられた「豊かさ」

宮本　信隆

赤茶け荒涼とした大地を想像していたが、雨季に入れば草も芽吹くのだろう。薄く雑草が大地を覆っている。しかし、高原地帯の農村の作物は、概して短く細い。頼りなげだ。降水量が少ないのがわかる。大地は硬い。貴重なスコップの柄を2本も折ってしまった参加者もいた。経済的に豊かではないが、心に触れる温かいもてなしに感謝。一方、北京では様々なインフラ整備が進み、豊かに見える。この落差は理解の範疇を超える。「社会主義のいいところはすでになく、資本主義のいいところはまだ現れていない」(「ぼくらの村にアンズが実った」日経新聞社刊より)。

参加してよかった

久保　知美

現地2日目、農村で過ごす日だ。軽い気持ちで参加を決めた私が、事前学習会で不安になったことがある。体力がないのに植林できるのか、現地の人たちとうまく交流できるのかなど。

いよいよ植林。苗の接木部分のビニールを外すことから始め、苗や砂を運んだ。力仕事が苦手でも植林できた。

村人との交流では、宿泊先の人と、あまり話をしなかったのが心残りだ。

今回、出発前に不安だったことは、実際には問題ではなかったし、様々な経験ができて楽しかった。来年4月からは、『かけはしの森』に植林できる。多くの人に参加してほしい事業だ。

黄土高原を訪ねて

山本　直弘

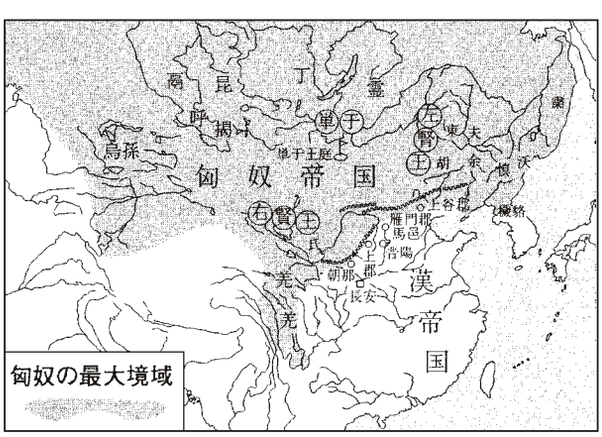
北京から西へバスで約6時間、そこに広霊県苑西庄村がある。75世帯204名が暮らすこの村は辺り一面黄土につつまれており、乗り物が通れば土煙が立ち昇る。小学校付属果樹園があり「緑の地球ネットワーク」の支援のもと、村人総出で杏を栽培している。果実と種は加工して出荷するという。しかし、土壌と水不足の問題で苗がなかなか根付かない。日本人が植樹にくるときはいつも雨を連れてくると大同では言うそうだが、われわれが訪れる前日も雨が降った。来年にはどれほど成長しているか楽しみにしつつ、緑化支援事業の継続の大切さを痛感した。

黄土高原史話〈31〉

「馬邑の役が導火線」

谷口　義介（摂南大学教授）

「馬」は文字どおり馬の象形。ただし甲骨文字ができたころ、体高140センチ足らずで頭でっかち、頑丈な骨格。殷墟出土の100体ばかりの観察によれば、現代のモンゴル馬に似た感じとか。「邑」は会意の字で、上の□は城壁のめぐる形、下の巴は人がひざまづく形で、あわせて城中に人の集住するさま。つまり、むら・まち・みやこという意味です。



しかして＜馬＞は遊牧騎馬生活の、＜邑＞は定住農耕社会の、それぞれ象徴とはいえまいか。

『史記』匈奴列伝にいう。

畜牧に随ひて転移し、その畜の多き所は則ち馬・牛・羊。……水草を逐ひて遷徙し、城郭・常処・耕田の業なし。

さて、地名としての雁門郡馬邑県。今の山西省朔県の北西に当り、大同市の南西100キロほど。漢代には、まさしく遊牧・農耕両地域が混在しているところです。

本シリーズ＜22＞「天下分け目の白登山」で、一度出てきたことがある。

前201年、漢の高祖劉邦は、勇武で聞こえた韓王信を警戒し、遠く太原へ移すという厄介払い。面白からぬ韓王信、匈奴に通ずる意図も秘め、辺塞に近い馬邑へと、自ら転封を願い出る。その意を察した冒頓単于、大挙して馬邑を囲み、両者の間を使者が往来。結局、信は匈奴に降り、兵を合わせて太原を攻め、翌年、高祖を平城（大同）まで

誘い込む。とどのつまりが「平城の恥」。これより漢は匈奴に対し、実質的な服属関係に入ります。

約70年へた前133年、馬邑で再び事件が起る。

土地の豪族聶壱なる者の献策を容れ、漢の武帝は謀略を裁可。

まず聶壱、いつわって匈奴に奔り、軍臣単于に内通を約す。

「吾、能く馬邑の令・丞・吏を斬り、城を以って降らん。財物尽く得可し」。

馬邑に還って囚人の首を城下に懸け、裏切りの証拠を示せば、使者より報告を受けた軍臣、十余万騎を従えて、武州（左雲県の南）の塞に攻め入ります。このとき漢は、三十余万の伏兵を馬邑近くの谷間にひそませ、今や遅しと待ち受ける。行く行く略奪しながら馬邑へ百里と近づいた軍臣、さすが英傑冒頓の孫、決してボンクラではありません。野に家畜のみ見えて牧人の影一つも無きを不審に思い、烽台を襲って漢兵を捕らえ、策略を知るや、騎兵をまとめて長城の外へと引き上げます。一方の漢軍は、追うもならず、地団太踏んで悔しがる。

これより匈奴は和親を絶ち、辺境を侵して、盛んに略奪。武帝政府も方針を転換、大軍団を編成し、各処に遠征を繰り返す。

馬邑の役は、漢－匈奴全面戦争の導火線といえるでしょう。

植物屋のこぼれ話（続編）その9

立花　吉茂（GEN代表・花園大学客員教授）

●水不足が世界を脅かす

世界人口が60億人を超えて、水と食糧の不足が現実のものとなりつつある。灌漑農業地域の畑地の塩分濃度の増加により古代文明は消滅した。この状態はいまも変わらずつづいている。しかも、世界の穀倉地帯で地下水をかつてないペースで汲み上げている。中国北部のみならず、世界各地で地下水位は年々数メートルずつ低下している。地球の温暖化は地球の水収支に影響を与え砂漠化がすすむ一方で、洪水が起こるというアンバランスが進行している。「水不足が世界を脅かす」という本が出版され、日本語版も出ている。読んでみて「地球が危ない」と実感した。

●川殺しの世紀

世界中ほとんどの国で巨大ダムが造られ、川は堤防で囲われた。水害を防ぎ、灌漑に利用し、発電、工場、水道に水を利用するためだ。このような近代的な河川政策は人びとに物質的豊かさをもたらした反面、生態系が破壊され、魚釣りや川遊びの場をなくし、川漁や河川のもつ多様な価値が犠牲になったのだ。それだけではない。近代河川工法は渇水や水害を助長しているのではないか、という反省が欧米では近年強くなっているようだ。

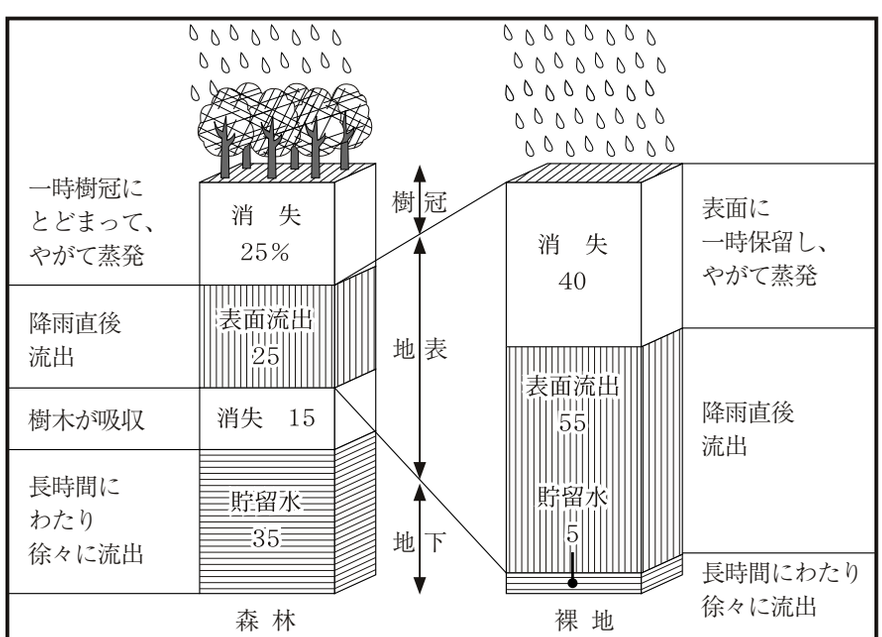
明治以来日本の治水対策は［高水工事］がおこなわれてきた。高水工事とは1）最大降水量（150～200年に1度の豪雨）の決定　2）川幅確保、河川掘削、堤防嵩上げ、川の直線化　3）放水路建設（下流のダムと共通）　4）上流にダムを建設　5）土地の有効利用（川と家および田畑との完全分離）。によって100％水圏、100％陸地とした。これによって、もし河川が氾濫すると救い難い大災害となる。

これに対し［低水工事］というのがある。これは1）中小洪水は処理するが、大洪水は氾濫を覚悟する　2）水害防備林、乗越堤、霞堤、水中橋の設置　3）遊水面積の確保（遊水林）、建物、住居の被害軽減　4）天然の流量調節機能（岩石、絶壁、草木、湾曲流）　5）水田、ため池を遊水場所として活用。

現在ダムを壊して低水工事に切り替えている国があるという。残念ながら日本の建設省にはそのような意識は希薄なようだ。

●緑のダムを増やせ

低水工事で自然な流れを通じて山林の土砂や養分が海に運ばれれば、やせた砂浜は復活し魚のエサも増える。ダムを減らして、人工林の間引きをおこなって、自然林に近づけ、山に水をストックさせれば壊したダムの水量よりも豊かになるはずである。スギ山は間引かないと、経済林としても環境保全林としても最低である。里山は二次林であるから、私の判断では手を加えるよりも放置して自然林に戻す方が環境保全には役立つと信じている。



林地と裸地の雨の流れの比較（1994年9月28日、朝日新聞より）

情報ひろば いろんなかたち

＊当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
＊当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

第12回 森林と市民を結ぶ全国の集い

【11月11日（土）】
★シンポジウム（参加費1,000円）
14時～17時30分（受付13時より）
大阪YMCA会館2F大ホール
○基調講演「森とともに生きる社会をめざして」安田喜憲氏（国際日本文化研究センター教授）
○パネルディスカッション「参加から協働へ」
コーディネーター　石井晃氏（元朝日新聞論説委員）
パネリスト　浜田久美子氏（NPO法人森づくりフォーラム理事）／公文正人氏（サントリー（株）環境部長）／小林忠秋氏（林野庁森林保全推進室長）／奥野壽一氏（林業家）
★交流会（参加費3,000円）
18時～20時／大阪国際会議場グランキューブ大阪5Fカフェテリアキューブサンク
【11月12日（日）】
★分科会（参加費1,000円）
10時～16時／大阪YMCA会館9、10F小会議室
テーマ「これからの森づくり」
○第1分科会－市民・企業・行政の連携について
○第2分科会－森林環境教育について
○第3分科会－森づくり活動の安全確保について
★フィールドワーク（参加費4,000円）
8時30分大阪YMCA会館前集合
テーマ「様々な森林ボランティア活動」
大阪府・奈良県内7か所の森林ボランティア活動地から1つをえらんでご参加ください。
★閉会式　16時～16時30分／大阪YMCA会館
●申込み締切：9月29日
●問合せ・申込み用紙請求：第12回森林と市民を結ぶ全国の集い実行委員会事務局（大阪市中央区馬場町3-35（財）大阪みどりのトラスト協会内
TEL. 06-6949-5705　FAX. 06-6949-5707
http://www.ogtrust.jp/）

編集後記

郵政公社の国際ボランティア貯金が、来秋廃止されるという新聞記事を読みました。GENも初期にはずいぶんお世話になりました。ゼロ金利解除で、ようやく配分金も増えると思われるこのタイミングで廃止とは。それに、この国際ボランティア貯金に協力するために口座を開いた人もたくさんいたはずです（私も通帳つくりました。つくっただけですが）。

小泉総理の看板であった郵政民営化によって、日本の草の根国際貢献の窓口がひとつ失われるわけですが、どうにも腑に落ちません。配分金は預金金利の一部、すなわち預金者のお金ですから、郵政公社の懐はいたまない。負担は運営費だけでしょう。民営化を機に、より柔軟で効率的な運営を実現し、これまでの実績をいかしながらリニューアルすれば、国際的にも評価されているCSR活動としておおいにアピールすると思うのですが……。（東川）